

ローラ・ジーン・リビーと「働く女の物語」

尾崎 俊介

1 19世紀末の人気作家ローラ・ジーン・リビー

Catherine Maria Sedgwick の *A New-England Tale* (1822) , Suzan B. Warner の *The Wide, Wide World* (1850), Maria S. Cummins の *The Lamplighter* (1854) など、19世紀前半から半ば過ぎにかけてアメリカで隆盛を誇った女性小説の要諦は、何らかの事情で孤児のような立場になったヒロインが、生きていくために様々な苦勞を重ねながらも、自らの才覚と強い意志、そしてキリスト教徒としての堅い信仰を頼りに苦境を乗り越え、最終的に自らを中心とした家族を形成し幸福になる、というふうに話が展開するところにある。つまり重要なのは、ヒロインが一度失った「家庭」をいかに自らの手で再構築するかということなのであって、だからこそこれらの女性小説は「家庭小説」とも呼ばれるわけだが、そのことは例えば Herman Melville の *Moby-Dick, or the Whale* や Mark Twain の *Adventures of Huckleberry Finn* など、19世紀後半のアメリカの男性作家の多くが、しばしば家庭を捨て、魑魅魍魎の跋扈する外部世界に飛び出すヒーローを描いたことと考え合わせれば、非常に興味深いところである。¹

一方南北戦争以降の時代になると、さすがに家庭小説のマンネリズムに辟易したのか、Ann S. Stephens, Metta V. Victor, E.D.E.N. Southworth, Mary Agnes Fleming, 'Bartha M. Clay'² といった女性作家たちが従来の家庭小説の枠組みから離れた小説を書くようになってきた。これらの作家たちが書いたのは、運命の巡り合わせで天涯孤独の身の上になったヒロインが、邪悪な男や嫉妬に狂った女など、悪漢たちの奸計に翻弄されながら波瀾万丈な人生を歩いていく、といった小説である。ヒロインがいかに家庭の幸福を勝ち得たかでは

なく、ヒロインが経験する様々な危機的状況そのものをスリリングに描くことで、(女性)読者をはらはらさせ、またその紅涙を絞ることに意を用いたのだ。その結果、彼女たちの書く小説は時に煽情的かつ悲劇的なものとなり、19世紀を代表する女性誌 *Godey's Lady's Book* の名編集長にして当時の女性作家のお目付役たる Sarah Josepha Hale から「正しい趣味と善き判断によって規定された枠を逸脱している」³ と批判されることにもなったわけだが、それでもこの種のメロドラマの人気は高く、その後 19 世紀の末に至るまで大衆的なストーリー・ペーパー (=家庭向け週刊小説新聞) や雑誌に数多く掲載され、当時の女性読者を虜にした。

そしてこのような大衆的メロドラマの流行に棹さし、19 世紀末のアメリカで絶大な人気を誇ったのが、Laura Jean Libbey (1862-1924) という女性作家である。⁴ 現在では文学辞典にすら名前の載ることが少ない「忘れられた作家」の一人であり、その伝記的事実には不明な点が多いが、かろうじて知られていることを総合すると、ブルックリンの外科医を父に持ち、カレッジ教育まで受けたという中流階級の出身で、17 歳の時に書いた小説が *New York Ledger* なる人気ストーリー・ペーパーに掲載されたほどの早熟の作家であったらしい。そして本格的に創作活動を始めた 1882 年以降その人気は鰻登りとなり、1880 年代から 1890 年代にかけて、前記『レジャージャー』紙をはじめ *The New York Family Story Paper* や *The Fireside Companion* といった人気紙に彼女の作品が掲載されない週が無かったと言われるほど、大衆的な人気を得た作家となった。何しろ最盛期には年間 6 万ドルもの執筆料を得、海外旅行にも数度にわたって出かけていたというのだから、リビーは当時の作家として破格の成功を収めていたと言ってよいだろう。では、その 19 世紀末随一の人気作家、ローラ・ジーン・リビーとは一体どのような人物であり、またその小説とは如何なるものだったのだろうか。

2 リビー作品の波瀾万丈

前述したように、今日ではほぼ忘れられた作家となってしまったリピーの作品を読むことはさほど容易ではない。しかし幸いなことに彼女の代表作の一つである *The Master Workman's Oath: or, Coralie, the Unfortunate: A Love Story, Portraying the Life, Romance, and Strange Fate of a Beautiful New York Working-Girl* (以下『職工長の誓い』と略称) という作品が 19 世紀大衆小説のアンソロジー⁵ に収録されているので、若干長くはなるが、ここでこの作品の内容を詳しく紹介してみよう。

この作品の主人公コラリー・ハーディングは、ドレクセル縫製会社に勤める 16 歳のお針子である。唯一の肉親であり、かつて同じ工場で働いていた母親が病を得て亡くなってから、天涯孤独の身の上となったコラリーであるが、その美しさと性格の良さから仲間内の人気者となり、上司の受けも良く、まさに工場の花となっていた。

ところが、ある日勤めを終えて帰路についたコラリーは、以前から彼女に目をつけていた女工監督のロバートに誘惑されてしまう。もちろんコラリーは彼の誘いをはねつけるが、ロバートは監督という立場を利用してなおも執拗に彼女にまとわりつく。そんな彼女を救ったのは、たまたま通りかかったドレクセル社社長の甥のアランだった。彼はロバートをその場で解雇し、コラリーを家まで送ることを申し出る。だがコラリーとの出会いは、アランにとって大きな意味を持つこととなった。というのも道すがら一通りコラリーの家の事情を聞いている間に、アランはコラリーの美しさ、優しさにすっかり打たれてしまったからである。実はアランには伯父が後見人となっているアイリーンという許嫁がおり、彼女と結婚することが次期社長となる上での条件となっていたのだが、コラリーに一目惚れしてしまったアランは、社会的な地位や財産を保証してくれるアイリーンとの結婚を放棄し、密かにコラリーと結婚してしまう。

だが新婚初夜を迎えようとしていたアランの元に、双子の兄アルフレッドより助けを求める電報が届いたことから事態は急変する。疑うことを知らぬ

アランは、コラリーに事情を説明しないまま電報に指定されたある客船に乗り込むのだが、そこで何者かに薬を盛られて眠らされ、そのまま遠洋航路の船上の人になってしまう。一方、アランが一向に帰宅しないことに不安を募らせていたコラリーのもとに、アランとアイリーンの結婚式が近く行なわれるとの知らせが届く。そして半信半疑のまま指示された教会に赴いたコラリーは、確かに二人の結婚式が執り行われているのを目撃する。無論、これら一連の出来事は、アランに会社を解雇されたロバートが仕組んだ罠であり、コラリーが目撃したのは、アランの双子の兄アルフレッドが伯父の財産目当てでアイリーンと結婚しようとしているところだったのだが、アルフレッドをアランと見間違えたコラリーは、最愛の人から裏切られたと思ひ込み、絶望に打ちひしがれる。

そんなコラリーが傷心を抱えて夜の町を彷徨っていた丁度その時、彼女は年配の女性が病院へ運び込まれようとしているところに遭遇する。どうやら天然痘の患者で、病院に入院しても看護する人がいないとのこと。人が困っているのを放っておけない性格のコラリーは、この身寄りのない老女の世話を買って出る。ところがコラリーの献身的な介護によって一命をとりとめたこの老女は、実はモントストロッサー夫人という大金持ちであることが判明、夫人は命の恩人となったコラリーを養女に迎え入れる。

かくしてコラリーは一介のお針子から一躍資産家の娘となって、ニューヨーク中の上流階級の男たちの憧れの的になるのだが、そんなある時、舞踏会に出席した彼女は偶然アランと再会することになる。アランはあの後、結局伯父から会社を受け継ぎ、社長となっていたのだ。彼は自分の帰りを待つことなく姿を消したコラリーのことを、財産目当てで自分と結婚しようとしたのだと誤認していたものの、まだ彼女のことが忘れられないでいた。しかしコラリーもまたアランのことを誤解しているので、彼に対してすげない態度をとり続ける。そして半ばアランへの当て付けもあって、コラリーはその夜、アランの友人のスタフォードの求婚を受け入れ、彼との結婚を承諾する。

そして結婚式当日。早まった決断をしてしまったことを後悔しながら庭に出て物思いに耽っていたコラリーの前に突然アランが現れ、もう一度二人でやり直したいという思いを彼女に伝える。しかしすっかりアランのことを誤解しているコラリーは彼を避けるかのように後ずさりし、そこに口を開けていた古井戸に落ちてしまう。それを見たアランははつきり自分が彼女を殺してしまったと思ひ込み、その後熱病に取りつかれ、生死の境を彷徨う。その後、意識が回復してからも罪の意識に苛まれたまま、財産目当てでアランに近づいてきたアイネズという女との結婚を承諾してしまう。

ところが実はコラリーは死んでいなかった。たまたま井戸の中程に隠れて立ち聞きをしていた悪漢ロバートに抱き取られていたのだ。かくして凶らずもコラリーを手に入れたロバートは、彼女をいったん精神病患者専用の病院に監禁し、いずれ自分の愛人とすることを目論む。しかし彼の計画はそれだけではなかった。邪悪な彼は、かつて自分を女工監督の座から追いやったアランに対する復讐の念を燃やし続けていたのである。ロバートは、アランがアイネズと結婚したことを見計らってからコラリーを自分の愛人にしたことを彼に伝え、しかも彼を重婚の罪で刑務所に送り込むことを企んでいたのだ。アランは誤解していたが、アランとコラリーの結婚は成立していたのである。

ところが悪党の命運もここまでで、コラリーを精神病院から自分の住まいに移す途中、ロバートは交通事故にあつて瀕死の重傷を負ってしまう。そして自分の命脈が尽きたことを知った彼はアイネズとの結婚式が執り行われる寸前にアランを呼び出し、すべては自分の罠であったこと、そしてコラリーはまだ生きていることを告げ、そこで息絶える。事情を知ったアランは、ただちにアイネズとの結婚を取りやめ、半狂乱となってコラリーの居所を当て所もなく探し続ける。

一方、交通事故のどさくさにまぎれてロバートのもとから逃げ出したコラリーは、たまたま近くに住んでいたお針子時代の親友、フィードラの家にかくまわれていた。しかしロバートの魔手を逃れた彼女を襲ったのは、また別

の試練だった。フィードラからの連絡でコラリーを探し当てた職工長リチャード・マーシャルが、コラリーの死んだ母親から預かっていた手紙を彼女に手渡しに来たのだ。その手紙はコラリーの出生の秘密にかかわるものだった。コラリーの母親は、実は彼女の真の母親ではなく、叔母だったのである。真の母親はその叔母の妹で、彼女はかつてアランの伯父と結婚したものの、二人の間に生まれた子供が一族の資産を相続することになるのを阻止すべく、アランの両親によって苛められ、家から追い出されてしまったのだ。その後彼女は生まれたばかりのコラリーを姉に託して亡くなったのだが、その結果、本来ならドレクセル家の総領となるべきコラリーは、貧しいお針子の娘にならざるを得なかった。つまりコラリーの本来の地位を奪った従兄弟アランは、コラリーにとって不倶戴天の敵であり、職工長に託された母親（＝叔母）の遺言とは、コラリーにアランに対する復讐を命ずるものだったのである。

このことを知ったコラリーは自らの運命を嘆きつつ、とりあえずはモントストロッサー夫人の元に帰ろうとするのだが、夫人は既にアイネズによって毒殺されていた。そればかりでなく、アイネズはコラリーが生きている以上、自分とアランの関係の修復に水を差すことになると考え、彼女をも亡きものにしようとして眠り薬を盛り、森の中の朽ち果てた工場に閉じ込めてしまう。しかも、その後落雷によって工場は炎に包まれる。

だがその時、天の配慮か、必死の思いでコラリーを探し回っていたアランがこの燃えさかる工場の中にコラリーの悲鳴を聞きつけ、彼女を助け出すことに成功する。しかし、あまりのショックでコラリーは正気を失っていた。医者によると、手術しなければ正気は戻らないが、その成功率はわずかに10%であるという。窮地に追い込まれたアランは、それでも敢えて医者に手術を要請し、やがてコラリーは見事健康を回復、かくしてすべての危機を乗り切ったアランとコラリーは、その後末永く幸せな家庭を築いたのである。

3 働く女の物語

以上、リピーの代表作の一つである『職工長の誓い』の筋書きを述べてきたが、敢えて身も蓋もないことを言うならば、ある経緯から孤児の身の上となり、工場で働くようになった若い娘が、最終的に善良で金持ちの美青年と結婚して幸福になる話、ということになる。だが単純この上ない筋書きは、二人の恋路を邪魔する悪漢たちの暗躍により、ハッピー・エンドの大団円にたどり着くまでに延々と回り道をする。そのことは上に紹介してきた『職工長の誓い』の筋書きからも感じ取られるだろうと思うが、実はこれでも重要なエピソードの幾つかを割愛しているのであって、実際にはここに紹介した以上に波瀾万丈な筋書きなのだ。その意味でこの小説は、先に述べた 19 世紀後半の大衆的メロドラマのカテゴリーに明らかに属するものではあるのだが、それでいてヒロインのコラリーはこれらの危機的状況をすべて克服し、結局はヒーローと結婚して幸福な家庭を築くのだから、その点では 19 世紀前半の「家庭小説」の枠組を継承しているところもある。つまりリピーの小説というのは、一方で「家庭小説」の枠組みを維持しつつ、他方、その中に波瀾万丈なエピソードをふんだんに盛り込むことで、「大衆的メロドラマ」としても成立しているのである。これは、たとえヒロインがいかなる危機的状況に陥ろうとも、最終的には彼女は金持ちの紳士と結婚して幸福になるはずだという確信を読者に与え、いわば安心してスリルを味わうという至福の読書体験を提供するには非常に都合のよい文学形式であり、このような形式に則ったストーリー展開こそ、リピー作品のトレードマークとなっていたのだ。

だがローラ・ジーン・リピーの作品のトレードマークは、スリルと安心を同時に提供するお決まりのストーリー展開だけではなかった。実はリピー作品にはもう一点非常に顕著な特徴があり、それが彼女の作品群を同時代の他のメロドラマから区別しているのだ。それは、リピー作品に登場するほぼすべてのヒロインが若年の（正確に言えば 16 歳の）女性工場労働者だったこ

とである。この時代の大衆的メロドラマの定石に従って、リビーの書く小説のヒロインが一様に美しく性格の良い少女であることはその通りだが、それに加えて彼女たちはほとんど必ずと言ってよいほど、大都会ニューヨークの縫製工場などで働く貧しい「勤労少女」だったのだ。これはリビーの初期の代表作である *Leonie Locke; or, The Romance of a Beautiful New York Working-Girl* (1884) から晩年の作品に至るまで一貫して見られる設定で、それゆえリビーの書く小説はしばしば「働く女の物語」(＝ワーキングガール・ナラティヴ)と呼ばれているのである。⁶

もっとも、ワーキングガール・ナラティヴというのは便宜的な言い回しに過ぎず、実際のリビーの小説では、ヒロインが工場で働いているシーンはほとんど描かれぬ。一世代前の「家庭小説」とは異なって、リビーの小説ではいかなる意味においても「労働」というものの価値なり、神聖さなりが云々されることはない。むしろヒロインの年若い勤労少女が自分の勤める工場の経営者の跡取り(息子/甥)と恋に落ち、彼と結婚することで一夜にして財産と社会的地位とを手中に収め、労働の重荷から解放されることにこそワーキングガール・ナラティヴの要諦があるのだ。リビーの描く勤労少女出世譚は、常に他力本願なのである。

そしてこの他力本願のシンデレラ・ストーリーを、リビーはデビュー当初から 20 年近くにわたって書き続けた。何しろ現在確認されているだけでも 82 の作品が残っていて、それだけでも相当な多作と言えるが、さらにそれらの作品群が何度も版を重ね、その総売上げ部数は 1600 万部に達したと言われているのだから、19 世紀末のアメリカはリビーの描く勤労少女のシンデレラ・ストーリーで満ち溢れていたと言っても過言ではない。実際、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての時代、「リビー」の名はアメリカにおいて一つの文学ジャンルになっており、前述したような内容を持つ勤労少女出世譚は十把一絡げで「リビーもの」(Libbey's)と呼ばれていた。リビーより一世代ほど前に世に出た作家にホレーショ・アルジャー・ジュニア(Horatio

Alger, Jr., 1832-1899) という人がいて、貧しい少年が生来の知恵と勤勉さと儉約とを武器に出世していく小説を量産し、ついに「ホレーショ・アルジャーもの」という文学ジャンルを作り上げたことはよく知られているが、「リビーもの」なる文学ジャンルは、いわばその知られざる女性版だったのである。⁷

4 「勤労少女出世譚」の隆盛

ところでリビー作品のようなワーキングガール・ナラティブが紡がれるには、その前提として実際に「働く女」というものが存在しなくてはならないことは言うまでもない。事実、アメリカでは南北戦争以降の工業化の流れを受け、1860年頃から女性が工場での賃労働に携わることは、さほど珍しいことではなくなっていた。具体的に数字を出すならば、1870年には16歳以上の女性の15%が職に就いていたが、この数字は年を追う毎に増え、1880年には16%、1890年には19%、1900年には21%、1910年には26%の女性が賃労働に従事していたという。しかもこれは16歳以上のすべての女性に占める割合であって、例えば16歳から20歳までというように年齢の幅を絞れば、1900年にはこの年代の女性の3人に1人が働いており、その総数は400万人に上ったとも言われている。⁸

ただ、この種の工場労働というのは案外過酷なものだったらしく、特に1870年代には、女性工場労働者に課せられた過剰労働負担が一つの社会問題として表面化し、その結果、雑誌の女性記者が実際に工場に潜入して自ら過酷な労働を体験し、それをノンフィクションの記事に仕立てて大企業の労働者搾取を告発する、というようなこともしばしば行なわれていた。特に19世紀半ばにミシンが開発されて以来、縫製工場での縫製作業は女性向け工場労働の代名詞となっており、この種の工場労働に携わる女工たちの過酷な労働ぶりを告発するアメリカ版女工哀史は、19世紀末の曝露ジャーナリズムの恰好の題材となっていたのである。⁹

だがそうは言っても、勤労少女の悲惨な生活ぶりばかりが、当時世間の関心の的になったわけではない。むしろ人々が喝采をもって迎えたのは、貧しい女工が何らかの幸運によって大金持ちになった、というようなシンデレラ・ストーリーの方である。例えばその種のものとして最も有名な作品に、*New York Weekly* なるストーリー・ペーパーの 1871 年 5 月 25 日号に掲載された Francis S. Smith の「お針子パーサ」(“Bertha, the Sewing Machine-Girl; or, Death at the Wheel”) という小説がある。¹⁰ 残念ながら筆者はまだこの作品を入手していないのだが、1926 年に封切られたその映画版では、温順な性格と美貌ゆえに縫製工場の花であったヒロインのパーサ・スローアンが、上司モートンから誘惑され、危うく貞操を奪われかけたところを同僚のロイに助けられ、このことがきっかけで恋仲となったパーサとロイがめでたく結婚する、というストーリーになっている。しかもパーサの夫となったロイは実はこの会社の社長の身をやつした姿だったのであって、要するにこのロマンスは、自らの美德によって一夜にして社長夫人にまで出世したお針子の幸運を描いたシンデレラ・ストーリーなのだ。そしてこの一種の「都市伝説」とも言うべきこの勤労少女出世譚は、たちまち一般大衆の圧倒的な支持を受け、その後何度となく復刊されることとなった。

ところが 1880 年代になると、この都市伝説にもう一ひねりが加えられるのである。1885 年、同じ『ニューヨーク・ウィークリー』紙に、今度は「女工に遺産が転がり込む」(“A Mill Girl Becomes an Heiress”) なる文章が掲載されたのだ。これは母親に死別し、また父親にも生き別れてお針子となっていたメアリー・ギャリティーが、その父親の死に伴う遺産相続のために探し出され、遺産を受け継いで資産家になった顛末を綴ったもので、これだけ見れば前述した「お針子パーサ」と同工異曲の勤労少女出世譚に過ぎないわけだが、一つ異なっていたのはこの記事が「創作欄」ではなく「報道欄」に掲載されていたことであった。つまり、この話は「創作」としてではなく「事実」として「報道」されたのだ。しかも念の入ったことに、この新聞の同じ号に

は例の「お針子パーサ」が再掲載されていたため、人々はノンフィクションとフィクションの両面から、貧しい一介のお針子が奇跡的な幸運を掴むシンデレラ・ストーリーを読まされることになったのである。アメリカン・ドリームを実現させて金持ちになることが美德と考えられ、「野心の時代」とも言われたこの時代に、「女性版アメリカン・ドリーム」とでも言うべき出来事が、架空のお針子と現実のお針子、それぞれの身に起こったとなれば、第二のパーサ・第二のメアリーになり得る若い女性労働者たちの間に大いなる興奮と反響を巻き起こしたであろうことは容易に想像がつかだろう。

そしてまさにこの若年女性工場労働者層という時代が生んだ新たな文学市場を当て込み、売れ筋の「ワーキングガール・ナラティブ」を書き始めたのが、若き日のローラ・ジーン・リビーだったのである。既に紹介したようにリビーが書く小説というのは、清く貧しい勤労少女が様々な都会の危険に曝されながらも、最終的には若くハンサムで金持ちのヒーローとの恋愛を成就させ、一夜にして経済力と高い社会的地位を得る（取り戻す）という内容の冒険活劇であって、ヒロイン自らの努力と忍従によって長きにわたる辛苦に満ちた生活を乗り越え、最後には「家庭の天使」となってささやかな幸福を得る、というような従来型の家庭小説とは大いに異なるものであった。だが、19世紀も終わりに近づこうというこの時代、工場で働く若い女性労働者たちにとっては、「敬虔、純潔、従順、家庭的」といった一世代前の婦徳を強要してくるような家庭小説よりも、リビーの書くような陽気で軽い夢物語のような、否、現実味のあるシンデレラ・ストーリーの方が、よほど気晴らしになったのである。

そしてローラ・ジーン・リビーにとって幸運だったのは、この種のシンデレラ・ストーリーを書くことが、彼女にとってはまさに天職だった、ということである。そのことは後年、彼女の創作活動を口述筆記によって助けた Louis Gold なる人物の回想録を読むと明らかになるのだが、それによるとリビーは朝、新聞を読んで新しい小説の登場人物にふさわしい人名を探し、適

当な名前を見つけるとそこから想像を膨らませて物語を作り上げ、60枚から90枚程度の短い作品なら2日ほどで仕上げたというのだ。¹¹ もっともそんなふう書きなぐられる彼女の作品群には、同様なエピソードの使い回しが頻繁に見られ、一つ一つの作品が100%オリジナルというわけではなかったらしいが、それにしても事前に粗筋の計画を立てることもなくいきなり口述によって書き上げた物語が、そのまま何の加筆・修正を加えることもなく一個の作品となっていたというゴルドの証言を信ずる限り、この種のストーリーを編み出すことはリビーにとって何の造作もないことであったことが推測できる。

しかも、リビーは当時の女性としては稀に見るほどビジネス・センスに富んだ女性でもあった。彼女は自ら小説を書くばかりでなく、今で言う「文学エージェント」の役もこなしていたのである。彼女のこの方面での活躍については、米国ラトガース大学に残されているリビーの個人的な書類のファイルにその記録が残されているのだが、ここにはリビーが出版社に宛てて書いた自作のプロモーションの写しであるとか、あるいは自分が結ぼうとしている契約の結果、どれほどの利益が見込めるかを試算した覚え書きなどが残っており、いかに彼女が自分を売り込むことに熱心であったかが窺われる。¹² 本論の冒頭において「1882年頃から1890年代にかけて、彼女の作品がストーリー・ペーパーに掲載されない週が無かった」ということを述べたが、このような現象はワーキングガール・ナラティブの語り部としての天賦の才能と、完成した作品を雑誌や新聞に売り込む際の押しの強さを兼ね備えていたリビーによってのみ可能だったのだ。

そしてリビーにとってもう一つ幸運だったのは、この「若年女性工場労働者」という読者層が比較的安定した市場だったということである。というのもこの種の労働に従事する若年女性の多くが当時陸続とアメリカに押し寄せていた移民の娘たちだったからで、アメリカでの生活経験のそれほど長くない彼女らは、リビーの小説を、たとえそれが実際には何度目かの復刊であっ

たととしても、そんなこととは知らずに新刊本として享受していたのだ。つまり読者層が定期的に入れ代わり、市場がその都度リセットされてしまうため、リビーの作品はその不変のマンネリズムにもかかわらず、いつまでも飽きられることなく市場に出回ることができたのである。¹³ リビー作品の中には1930年代までの長きにわたって繰り返し復刊されたものもあるとされているが、その理由はまさにここにあったのだ。要するにリビーは、裕福な生活に憧れてアメリカにやって来ながら、実際には工場労働者として搾取される立場にあった無数の移民の娘たちに、勤労少女出世譚という束の間の夢を見させることで、自らの文名を挙げ、時代の寵児となったのである。

5 忘れられた作家へ

しかし、リビー作品が20世紀に入ってからもなお繰り返し復刊されていたのは裏腹に、リビー自身の創作活動は19世紀が終わりに差しかかる頃には既に終わっていた。というのもリビーは、彼女の崇敬的でありまた彼女の作品の一番の愛読者でもあった母親の死(1896年)を機に、作品を書くことを止めてしまったからである。そして母親の死の2年後、36歳になっていたリビーは、法律関係の仕事をしていた Van Mater Stilwell なる人物と結婚した。36歳での結婚というのは、当時としてはかなりの晩婚であるが、これはリビーの母親がリビーの結婚に強く反対していたからだという。なぜ彼女が娘の結婚に反対したのか、その理由は定かでないが、いずれにせよ結婚してから数年の間、リビーは訪れるもののほとんどない家の中で、無口な夫と愛猫のテディと共に、創作活動とは無縁の静かな暮らしをしていたと伝えられる。リビーのように活動的な女性にとって、この沈黙のうちに過ごされた結婚生活が幸福なものであったかどうか。この点に関してはリビーが亡くなった時、その遺産が夫ではなく彼女の姉とその子供たちに遺されたという事実から、何がしかの憶測が引き出せるだけである。¹⁴

ただリビーにとって確実に不幸であったのは、彼女が作品を発表しなくな

ってから 10 年近い月日が経過するうちに、ワーキングガール・ナラティヴの女王としてのリビーの名声が少しずつ過去のものとなってしまったことであった。そして、おそらくそのことに忸怩たる思いをしていたであろうリビーは、たまたま彼女の旧作が舞台化されるということがあったのを機に再び創作への野心を抱くようになり、今度は旧作を下地として舞台用の脚本を書き始める。だが、わずか 1 年半のうちに書き上げた 120 もの作品のうち、実際に上演されたのは一つとしてなかった。20 世紀に入って舞台演劇が大衆娯楽の王者としての地位を映画に奪われつつあったということももちろんあるが、それ以上にリビーが繰り返し書いてきたワーキングガール・ナラティヴが、一般には既に飽きられてしまっていたのである。その後リビーは己の知名度の高さを恃んで演劇界への進出を再度試み、どういう経緯によるものか、ついに自らヴォードヴィル・ショーの舞台に立つということまでやっていたが、プライドをかけたリビーのこの必死のパフォーマンスも、無残なる不評と失笑のうちに終わった。時代が既にリビーを追い越していたことは、もはや疑うべくもなかった。

リビーの文筆生活の最後となったのは、彼女が還暦に近くなった頃、*The New York Mail* という新聞から依頼された「キューピッド赤十字：傷ついた心の応急処置」（“Cupid’s Red Cross: First Aid to Wounded Hearts”）なる恋愛相談コラムへの執筆であった。かつてアメリカ中の勤労少女たちを虜にした一連の小説の作者ということもあり、連載開始時点でリビーのコラムは一面に近いページに掲載され、しかも彼女の（若い頃の）写真入りだったというから、新聞社としてはこの企画に相当な期待をかけていたことは明らかである。しかしこうした大きな扱いは裏腹に、リビーのコラムの人気は一向に上がらなかった。それもそのはず、彼女が担当したコラムの内容は酷いまでに時代遅れだったのだ。例えば「ある売り子の心」（“The Heart of a Working Girl”）と題されたコラムで、リビーはちょっとしたトラブルでお客を怒らせてしまったために解雇を申し渡されたデパートの売り子のエピソードを紹介

しているのだが、この話の結末は、悲しみのあまり不意に道路に飛び出した売り子を、当のデパートの社長の息子が車で危うく轢きそうになり、これがきっかけとなってこの若くハンサムな青年が彼女にプロポーズするという、きわめて「リピーもの」的な、作り物めいた内容になっていた。そしてこのエピソードから得られる教訓としてリピーは、たとえどんなにつらいことがあっても、ふいに思ってもみなかったような幸運が降りかかることもあるので、決して絶望してはいけないということを読者に向かって説くのだが、このようなエピソード、そしてこのような教訓が、30年前と同じように持て囃されるはずもなかったのである。

かくして鳴り物入りで始まったリピーのコラムは、すぐに目立たないページに移され、筆者の写真はなくなり、活字も小さくなり、やがて休載されることになった。そしてそれと同時に、リピーの小説家としてのキャリアもここで完全に尽きたのであった。その3年後にリピーが亡くなった時、ブルックリンの *The Daily Eagle* なる新聞がごく短い訃報を載せた以外、ニューヨークのどの新聞も、かつての人気作家の死を報道しなかったという。旧姓の「ローラ・ジーン・リピー」の名を刻んだ自らの墓を生前に作らせ、しばしばそこを訪れては、たまたまその墓に気付いた人々が、かつてこの作家の作品を愛読したことを互いに語り合うのを、素知らぬ顔で立ち聞きすることを晩年の密かな楽しみとしたリピーにとって、¹⁵ それはあまりにも寂しい幕切れであった。

6 ワーキングガール・ナラティブの系譜

このようにして19世紀末の人気作家ローラ・ジーン・リピーは、ほぼ忘れ去られた存在となった。今ではただアメリカ大衆文化に興味のあるごく一部の人の間でのみ、若年女性による工場労働の一般化といった当時のアメリカの社会事情を背景に一世を風靡した大衆作家として、その名が記憶されているばかりである。

だが、リビーが描いたワーキングガール・ナラティヴの影響力は、一般に考えられているほど小さなものではない。例えば、あまり知られていないことではあるが、実はアメリカ自然主義文学の雄たる Theodore Dreiser とローラ・ジーン・リビーの間には明らかな接点がある。ドライサーの自伝 *Dawn: A History of Myself* の中に、彼が若い頃、ストーリー・ペーパーに盛んに掲載されていたワーキングガール・ナラティヴを夢中になって読んだという記述があるのだ。¹⁶ しかも、彼が愛読していたストーリー・ペーパーというのが、リビー作品を多数掲載していた『ファミリー・ストーリー・ペーパー』や『ファイアーサイド・コンパニオン』だったというのだから、ドライサーを虜にしたワーキングガール・ナラティヴが、まぎれもなくリビー作品であった可能性はきわめて高い。

ドライサーとワーキングガール・ナラティヴの取り合わせを考えた場合、当然思い浮かぶのは彼の畢生の大作 *An American Tragedy* のことである。この作品は、とある縫製工場に働く美しい女工ロバータ・オールデンが、社長の甥であるクライド・グリフィスに見初められ、恋に落ちるというストーリーから始まるわけだが、これがまさにワーキングガール・ナラティヴそのもののストーリー展開であることは、これまでに述べてきたことから明らかであろう。だが誰もが知る通り、『アメリカの悲劇』のその後の展開は通常のワーキングガール・ナラティヴの逆を行く。一介の貧しい女工に過ぎないロバータは、出世欲に目のくらんだクライドにとって邪魔な存在となり、次第に疎まれ、ついには殺されてしまうのだ。つまり『アメリカの悲劇』は、ヒロインとヒーローの幸福な結婚で終わらせるべきワーキングガール・ナラティヴを敢えて悲劇的に終わらせることによって、現実の世界がそれほど甘いものではないことを読者に見せつけているのである。

もちろんここで言いたいのは、ワーキングガール・ナラティヴのストーリー展開にひねりを加え、悲劇で終わらせればそれで『アメリカの悲劇』が出上る、ということではない。しかし、このアメリカ自然主義文学の傑作

が生まれる背景として、リピー流のワーキングガール・ナラティブの蔓延があったという事実を確認しておく必要はあるのではないか。一般にアメリカ自然主義文学、とりわけシオドア・ドライサーへの影響ということについて言えば、Emile Zola をはじめとするフランス自然主義文学や、Herbert Spencer の社会進化論のことが言挙げされることが多いわけだが、それと同時に、あるいはより直接的な意味で、アメリカ大衆文学の世界における「リピーもの」の流行をドライサーが熟知し、それに対するアンチテーゼの意味を込めて彼流のワーキングガール・ナラティブを書いたのではないかという仮説は、検討するに値する問題ではないかと思う。

しかし、このような「一流文学」への影響という点もさることながら、大衆文学には大衆文学なりの文学史があり、その点から考えるとリピーの文学史上に占める位置というのはさらに興味深いところがある。例えばアメリカで 1960 年代から今日に至るまで女性読者の間で親しまれ続けている「ハーレクイン・ロマンス」のような大衆向けロマンスのストーリー展開の多くは、身寄りのないティーン・エイジャーのヒロインが勤め先の青年社長と恋に落ち、途中様々な対立や離反を繰り返しながら、最終的には結婚によって結ばれるというものであって、まさに「リピーもの」の骨組みをそのまま踏襲していると言っても過言ではない。つまりリピーが編み出した勤労少女出世譚のストーリー展開は、現代に生きる女性読者の心を魅了するだけの力を依然として保持しているのだ。

また逆に時代を遡ると、18 世紀イギリスで中流階級の女性読者を熱狂させ、その余波がアメリカにも伝わって当地における感傷小説の流行を作り出したと言われる Samuel Richardson の *Pamela, or Virtue Rewarded* という小説もまた、金持ちの屋敷に奉公に出された勤労少女パミラが当の屋敷の主に請われてその妻になる話であり、これもまた一種のワーキングガール・ナラティブであると言えなくもない。古典語で書かれた韻文こそが文学であり、本国語（英語）で書かれた散文など「女子供の読み物」と思われていた時代に

一世を風靡したこの『パミラ』という小説は、現在では「近代小説の祖」と見なされることが多いのだから、その点からすれば「近代小説は勤労少女出世譚から始まった」という言い方すらできるのである。

このように、ワーキングガール・ナラティヴの系譜をたどることは、取りも直さず近代小説の発展史をたどることでもあり、またこれらの勤労少女出世譚を愛した読者、すなわち女性読者という膨大な数の読書家たちの存在を文学史の中にあらためて定位することにも繋がるはずなのだ。そしてそのことは、従来の文学研究が明らかに怠ってきた作業なのである。その意味でワーキングガール・ナラティヴの女王たるローラ・ジーン・リビーとその作品には、まだ研究の余地が多く残されているのではないかと思うのである。

注

- 1 19世紀における女性作家と男性作家とのこのような対比については、佐藤宏子著『アメリカの家庭小説：十九世紀の女性作家たち』（東京：研究社出版、1987年）、p.47に示唆を受けている。
- 2 ‘Bartha M. Clay’とは特定の個人ではなく、米国 Street & Smith 社から刊行されていた数多くのダイムノヴェルの著者である複数の匿名作家を指す。
- 3 セアラ・ジョセファ・ヘイルがイーデン・サウスワースの作品について述べた評言。Michael Denning, *Mechanic Accents: Dime Novels and Working-Class Culture in America*, (London/New York: Verso, 1998), p.189. を参照せよ。
- 4 リビーについての情報は、上記 *Mechanic Accents* の他 Louis Gold, “Laura Jean Libbey,” in *The American Mercury* (September, 1931), pp.47-52, Joyce Shaw Peterson, “working girls and millionaires: the melodramatic romances of laura jean libbey,” in *American Studies* 24(1983), pp.19-35, Jean Carwile Masteller, “Romancing the Reader: From Laura Jean Libbey to Harlequin Romance and Beyond,” in *Pioneers, Passionate Ladies, and Private Eyes: Dime Novels, Series Books, and Paperbacks*, eds. by Larry E.

- Sullivan & Lydia Cushman Schurman (New York/London: The Haworth Press, Inc., 1996), pp.263-284, 及びインターネットサイトからの情報 (“American Women’s Dime Novel Project: Laura Jean Libbey” in <http://chnm.gmu.edu/dimenovels/authors/libbey.html>) に拠った。
- 5 Laura Jean Libbey, *The Master Workman’s Oath: or, Coralie, the Unfortunate: A Love Story, Portraying the Life, Romance, and Strange Fate of a Beautiful New York Working-Girl*, in *Popular American Literature of the 19th Century*, ed. by Paul C. Gutjahr, (New York/ Oxford: Oxford UP, 2001), pp.1022-1152.
 - 6 他に “working-girl novel” “working-girl genre” などとも言う。この分野の重要性を最も早く論じたのは Joyce Shaw Peterson であると言われる。注4を見よ。
 - 7 リビーとホレーショ・アルジャー・ジュニアについては、共通点と共に相違点も指摘される。ホレーショ・アルジャー・ジュニアの書いた小説のヒーローは、社会的身分が上昇するにつれて人格の陶冶も見られるが、リビーの小説のヒロインは最初から性格の良さが強調され、その後変化を見せない点など。Petersonの論考を参照せよ。
 - 8 Peterson, pp.19-20.
 - 9 Peterson, p.20. その他, 19世紀末の曝露ジャーナリズムについては John Tebbel & Mary Ellen Zuckerman, *The Magazine in America 1741-1990*, p.109. なども参照せよ。
 - 10 「お針子パーサ」, および後述する「女工に遺産が転がり込む」の記事に関しては Jean Carwile Masteller, “Romancing the Reader,” pp.269-270. を参照せよ。
 - 11 Gold, “Laura Jean Libbey,” pp.49-50.
 - 12 Masteller, “Romancing the Reader,” pp.268-269.
 - 13 Masteller, “Romancing the Reader,” p.267.
 - 14 以下リビー晩年の生涯については、主に上記 Louis Gold, “Laura Jean Libbey” に拠った。
 - 15 “American Women’s Dime Novel Project: Laura Jean Libbey” を参照せよ。
 - 16 Theodore Dreiser, *Dawn: A History of Myself*, (New York: Horace Liveright, Inc., 1931),

p.125. なお後述するドライサーと大衆文学との関連については Cathy N. Davidson & Arnold E. Davidson, “Carrie’s Sisters: The Popular Prototypes for Dreiser’s Heroine,” in *Modern Fiction Studies* 23 (Autumn): pp.395-407 や, Lydia S. Godfrey, “The Influence of Dime Novels on Theodore Dreiser,” in *Dime Novel Round-Up* 563 (October), pp.66-71 などの研究例がある。